

アジア研究

担当教員 仲里 効

対象学年 1年

単位区分 選択

開講時期 前期・後期

授業形態 一般講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

この授業は、共通科目の半年間の講義であるため、アジアに関するごく基本的事項の認識と再確認を主眼としている。アジアに関する基本的知識と様々な問題や課題の所在を確認したい。そして、受講生各自の関心に基づき、アジアに関する多種多様な導入口を見だし、その関心の持続とより個別的な課題の探求のきっかけとなるような授業をこころがけたい。

【授業の展開計画】

日本はなぜ植民地をもったのか。アジアにとってそのことはどのような経験だったのか。〈植民地経験〉という視点から激動するアジアの近現代を考えていくが、現在進行形で起こる時事的な問題もその都度取り入れながら進めていく。予定しているテーマは以下のとおりである。

週	授 業 の 内 容
1	多民族、多言語、多宗教社会としてのアジア
2	〈植民地経験〉という視点
3	アジアの近代と日本の近代（魯迅と竹内好の視点）
4	近代日本の植民地主義①（琉球処分と台湾領有）
5	近代日本の植民地主義②（韓国併合と中国侵略）
6	「15年戦争」とその帰結としての沖縄戦
7	戦争責任と〈植民地責任〉という視点
8	アジアにおける冷戦
9	二つの戦争、二つの戦後
10	アジアにおける「領土問題」
11	ポストコロニアル状況（継続する植民地主義）
12	脱植民地化への葛藤①（金時鐘と在日）
13	脱植民地化への葛藤②（山之口貌と川満信一）
14	「辺境東アジア」とせめぎあうアイデンティティ①
15	「辺境東アジア」とせめぎあうアイデンティティ②
16	沖縄から見たアジア

【履修上の注意事項】

私語厳禁

【評価方法】

出席、レポート、試験の三点を勘案して総合的に評価するが、その中でとくにレポートを重視する。ただし、出席は原則として毎回確認するので、レポートを提出したとしても、欠席の多い受講生は不可にする。

【テキスト】

授業では、適時プリントを配布する。

【参考文献】

授業の中で、毎回複数の参考文献を明示する。学期末には、その中から関心をもったテーマに関する文献を読んで、レポートの課題とする

アジア研究ゼミ

担当教員 李 ヒョンジョン

対象学年 3年

単位区分 選択

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4

準備事項

備考

【授業のねらい】

本講義では、東アジアにおける日本の隣国であり、相互理解の面においても欠かせない韓国に焦点を当てる。地理的に近い国でありながら、両国家間の政治的・歴史的要因から文化理解の面で長い時期断絶されていた日本と韓国であるが、近年においては「韓流」というサブ・カルチャー的要素が一躍買っている現状がある。今後、サブ・カルチャー的要素だけにとらわれず、真の相互理解を深めることは大変重要である。講義では、韓国の歴史や社会、文化などを理解し、日本・沖縄と比較していくことで、日本人としての自文化を再認識するとともに、今後における日韓の相互理解について考察していく。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容	週	授 業 の 内 容
1	ガイダンス「講義の流れ、評価方法など」	17	研究調査の方法と論文作成について
2	東アジアにおける韓国「概要と歴史」	18	文献探索と発表・討議
3	韓国の社会1「生活・経済」	19	文献探索と発表・討議
4	韓国の社会2「教育制度と今日の教育事情」	20	文献探索と発表・討議
5	韓国の社会3「IT社会と韓国語の変容」	21	テーマ設定における自己計画シート作成
6	グループ発表と討議	22	テーマに沿った調査報告
7	韓国の文化1「行事をめぐる伝統文化」	23	テーマに沿った調査報告
8	韓国の文化2「衣・食・住」	24	テーマに沿った調査報告
9	韓国の文化3「伝統から現代へ」	25	計画遂行における見直し
10	グループ発表と討議	26	調査結果の分析とまとめ
11	日韓相互理解1「韓国における日本観」	27	調査結果の分析とまとめ
12	日韓相互理解2「日本における韓国観」	28	研究結果の発表
13	日韓相互理解3「文化リテラシーの必要性」	29	研究結果の発表
14	グループ発表と討議	30	研究結果の発表
15	前期のまとめ	31	後期のまとめ・自己評価
16	後期の流れとテーマ設定に関する討議		

【履修上の注意事項】

各自がテーマを設定し論文を書くという前提で受講して欲しい。
自己計画シートを作成し、積極的に遂行していく姿勢を重視する。
また、協同のなかで自分の役割をしっかりと果たせるように頑張ってもらいたい。

【評価方法】

出席・クラス活動への参加度（30%）と口頭発表・課題（70%）などを合わせて評価する。

【テキスト】

テーマに合わせて随時プリントを配布する。

【参考文献】

高橋順一 他（1998）『人間科学 研究法ハンドブック』ナカニシヤ出版
北尾謙治 他（2005）『広げる知の世界—大学での学びのレッスン—』ひつじ書房
その他、必要に応じて講義のなかで紹介する。

アメリカ研究

担当教員 兼本 敏

対象学年 1年

単位区分 選択

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

このクラスでは、10の項目に基づいて学生の多くが既に持っているアメリカのイメージをチェックする。テレビや映画などを通して作り上げたイメージが偏った一部のアメリカでしかないことを知ってもらう。同時に、自己の持つイメージがどのように形成されたかを知ることで調べることの大切さを確認する。

【授業の展開計画】

学期末試験は課さない。10の項目についてアメリカを概観した後、各自の興味によってテーマを設定してもらい報告書（レポート）を提出してもらう。テーマの設定や書き方に関する資料は適宜指導する。

週	授 業 の 内 容
1	INTRO. 講義の展開と評価についての説明。 報告書の書き方指導
2	1. 歴史
3	2. 地理と地形
4	3. 移民(ヨーロッパ) と先住民
5	4. 産業
6	5. 政治
7	6. 教育と社会制度
8	7. マイノリティー
9	8. 文学
10	9. 映画
11	10. 音楽
12	まとめと質疑
13	参考資料の紹介および解説
14	報告書作成指導
15	報告書作成指導
16	報告書作成指導

【履修上の注意事項】

高校までに既習した気候、地形、産業について復習しておく（小・中・高校での社会科、地理、地学に相当する授業内容の復習）
地図帳と電子辞書を持参するのが望ましい。

【評価方法】

出席は当然であるが、遅刻・欠席は減点対象となる。
報告書で評価する。評価項目（構成・表現・データ量など）の配点に関しては講義初日に詳しく説明する。

【テキスト】

特に指定しないが、『新版アメリカ学入門』（南雲堂）『アメリカ文化への招待』（北星堂）は購入を薦める。

【参考文献】

講義内で適宜紹介する。

アラブの文化 I

担当教員 アリー、エルサムニ

対象学年 1年

単位区分 選択

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

「アラブの文化」というテーマで、アラブの文化、歴史、アラブ社会の現状について紹介したいと思います。まず、イスラム教が起こる以前のアラブの国々の状況を取り上げます。それから、イスラム教が起こってから現在までの、アラブ社会の様々な生活場面について述べる予定です。あわせて、アラビア語の初歩も講義したいと思います。

【授業の展開計画】

1. イスラム教が起こる前のアラブ社会（背景）
2. イスラム教の発生（イスラム教の経典「コーラン、ムハンマド予言者の教え「スンナ」）
3. イスラム教が起こってからのアラブ社会に与えた影響（次のことについて）
 - (1) 結婚（結婚する前の男性と女性の関係、結婚までの段階）
 - (2) 出産（男の子が産まれた場合、女の子が産まれた場合、出産後の儀式）
 - (3) 離婚（離婚の段階、慰謝料）
 - (4) 女性の在り方（母親、主婦、妻として）
 - (5) 家族（両親の役割、長男の役割、産児制限、親に対する子供の役割、遺産相続）
 - (6) 衣食住（アルコールと豚肉が禁止されている理由、食生活と健康のかかわり、女性及び男性の服装、寝室の分け方）
 - (7) 日常生活（昼寝習慣、紅茶と水たばこの雑談会、木曜日の夜の集会、金曜日の礼拝）
4. 初心者アラビア語講座
5. 初心者アラビア語講座
6. 初心者アラビア語講座

【履修上の注意事項】

【評価方法】

出席と日頃の受講態度で評価する。
評価テスト行う場合もある。

【テキスト】

特になし、必要に応じてコピー資料を配布する。

【参考文献】

アラブの文化Ⅱ

担当教員 アリー、エルサムニ

対象学年 1年

単位区分 選択

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

「アラブの文化」というテーマで、アラブの文化、歴史、アラブ社会の現状について紹介したいと思います。まず、イスラム教が起こる以前のアラブの国々の状況を取り上げます。それから、イスラム教が起こってから現在までの、アラブ社会の様々な生活場面について述べる予定です。あわせて、アラビア語の初歩も講義したいと思います。

【授業の展開計画】

1. イスラム教が起こる前のアラブ社会（背景）
2. イスラム教の発生（イスラム教の経典「コーラン」、ムハンマド予言者の教え「スンナ」）
3. イスラム教が起こってからのアラブ社会に与えた影響（次のことについて）
 - (1) 生活習慣（病気のと看、モアイ、心のささえ、コーヒーカップの占い、手相の占い、死亡について）
 - (2) 祭りと祝い（断食「ラマダン」、断食後の祭りなど）
 - (3) 文化と教育の関わり（男女共学についての考え方、学校休み、教科書の内容）
 - (4) アラブと他の宗教との関係（キリスト教、ユダヤ教）
 - (5) 墓地（埋葬の仕方、墓の形、向き、場所について）
 - (6) 女性の服装（ブルカ、ヘジャブ）、一人の夫が同時に二人以上の妻を持つこと（一夫多妻）について
4. アラブの文化とアラブの諸問題の関係（パレスチナ問題、テロの問題）
5. アラブの文化と沖縄の文化の共通点（ライフスタイル、心のささえ、モアイなど）
6. 初心者アラビア語講座
7. 初心者アラビア語講座
8. 初心者アラビア語講座

【履修上の注意事項】

【評価方法】

中間テストと期末テストを行う。
出席と日頃の受講態度を加味して評価する。

【テキスト】

特になし、必要に応じてコピー資料を配布する。

【参考文献】

イギリス研究

担当教員 藤波 潔

対象学年 1年

単位区分 選択

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

「イギリス」という国家は、他国とは異なる独自の社会体制や文化を有する国家である。そこで、本講義では、「イギリス」を歴史的に理解することを基軸に置き、「地域」「王室」「宗教」「帝国」といったキーワードを用いながら、「イギリス」の社会や文化の独自性の淵源を理解することを目的とする。とくに「イギリス」という国家を理解するためには、国家という単位を相対化して、「地域」「帝国」という観点から「イギリス」を理解する必要がある。こうした作業を通じて、「イギリス」と他の地域を比較する視座を提供する。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	ガイダンス
2	「イギリス」の構成要素①
3	「イギリス」の構成要素②
4	「イギリス」の構成要素③
5	「イギリス」の構成要素④
6	王室と宗教①
7	王室と宗教②
8	王室と宗教③
9	王室と宗教④
10	イラストと小説からみる「イギリス帝国」①
11	イラストと小説からみる「イギリス帝国」②
12	イラストと小説からみる「イギリス帝国」③
13	イギリスと帝国①
14	イギリスと帝国②
15	イギリスと帝国③
16	まとめ

【履修上の注意事項】

出席は毎回必ずとる。

【評価方法】

出席状況(40%)とレポート(60%)による総合評価。

【テキスト】

特定のテキストは使用せず、レジュメを配付する。

【参考文献】

講義の際に紹介する。

国際経済

担当教員 当銘 学

対象学年 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 前期・後期

授業形態 一般講義

単位数 2

【授業のねらい】

産業革命、運輸革命、エネルギー革命、情報通信革命は一国の経済活動の領域を拡大させ、もはや一国で経済が成り立たない。米国を軸とする第二次大戦後の新たな世界経済の枠組みは、日本などの先進工業国の台頭と列強諸国の植民地から多くの独立国を誕生させる一方で南北問題を浮上させた。「金本位制」「為替制度」「ガット体制」「IMF体制」「市場統合」「資本移動」「国際収支」「WTO協定」「エネルギー問題」「ハイテク技術」等の国際経済のキーワードを軸に歴史的・総括的に整理し理解することで世界経済の課題を考察する。

【授業の展開計画】

関連するテレビ特番のビデオや新聞・雑誌等の記事を教材として活用する。

週	授 業 の 内 容
1	Introduction
2	大航海時代
3	覇権国家の変遷
4	ボックス・ブリタニカ
5	アメリカ経済の勃興
6	戦後の国際経済体制
7	変動相場制への移行
8	70年代・80年代の世界経済
9	経済摩擦
10	市場統合と三極体制
11	WTO体制下の世界経済
12	90年代後期の世界経済動向
13	WTO加盟後の中国経済
14	現在の世界経済動向
15	総括 16回目にレポート提出とテストを行います
16	

【履修上の注意事項】

時事経済に関心をもつこと。レポートはワープロで作成すること。

【評価方法】

1000点満点 出席点：500点、レポート：300点、小テスト：200点
レポートと出席状況、理解度確認のための小テスト(2回)により総合的に評価する。

【テキスト】

特に指定はしない。プリントを使用する。

【参考文献】

『世界経済入門』 西川 潤著 (岩波新書出版)、『世界経済図説 第二版』 宮城 勇・谷屋禎三 著 (岩波新書出版)、 『ゼミナール 国際経済入門』 伊藤元重著 (日本経済新聞社)

国際コミュニケーション

担当教員 前原 直子

対象学年 1年

単位区分 選択

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

本授業では、国家間における情報やイメージの流通について、「コミュニケーション」という視点から理解・考察できるようになることを目指します。現代社会に特有なグローバリゼーションの侵攻とそれに付随する公的レベルにおける諸問題、マスメディアの役割、文化の政治について具体的かつ理論的に考察します。

【授業の展開計画】

1. イントロダクション：「国際コミュニケーション」とは？
2. 対話、相対主義と普遍主義、反エスノセントリズム
3. 「国際語」としての英語、英語帝国主義
4. アメリカナイゼーションと文化支配
5. ヨーロッパ中心主義と文化帝国主義
6. 日本人女性と「西洋」へのまなざし
7. オリエンタリズムと「非西洋」へのまなざし
8. 日本イメージの形成
9. ナショナリズム、ナショナルなもの
10. ナショナリズム、ナショナルなもの
11. クールジャパン、日本発マンガ・アニメ
12. 国際社会と人権（1）
13. 国際社会と人権（2）
14. 開発援助と教育
15. 総まとめ
16. 試験

【履修上の注意事項】

毎週、授業の終わりにレスポンス・ペーパーを書いてもらい、それを評価および受講生と担当教員との「対話手段」として用います。意欲的な授業参加を求めます。

【評価方法】

授業への参加姿勢およびレスポンス・ペーパー（40%）、最終試験（60%）を総合的に評価します。

【テキスト】

配布資料や新聞記事、映像教材等を用います。

【参考文献】

講義の中で適宜紹介します。

国際政治

担当教員 黒柳 保則

対象学年 1年

単位区分 選択

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

この講義では、二つの世界大戦とその戦間期の国際政治を、「戦争」「平和」「ナショナリズム」をキーワードとして通時的に取り上げます。この時期にスポットを当てるのは、近年こうした言葉のありようが国際政治のうえでそれぞれ揺らいでおり、「原点」にまでさかのぼってその行方を考えるよすがにしようとしたからです。資料をふんだんに用いて、隣接分野にも目配りをした分かりやすい講義をしたいと考えています。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	「パックス・ブリタニカ」から列強時代へ①－「パックス・ブリタニカ」
2	「パックス・ブリタニカ」から列強時代へ②－イギリスとドイツ
3	「パックス・ブリタニカ」から列強時代へ③－列強時代
4	第一次世界大戦とロシア革命①－ロシア革命とアメリカの参戦
5	第一次世界大戦とロシア革命②－大戦の終結
6	第一次世界大戦とロシア革命③－コミンテルンとパリ講和会議
7	ヴェルサイユ・ワシントン体制の成立と展開①－ヴェルサイユ・ワシントン体制の成立
8	ヴェルサイユ・ワシントン体制の成立と展開②－アメリカの介入とそれへの対抗
9	ヴェルサイユ・ワシントン体制の成立と展開③－ロカルノ体制
10	ヴェルサイユ・ワシントン体制の崩壊①－ヴェルサイユ体制への挑戦
11	ヴェルサイユ・ワシントン体制の崩壊②－ワシントン体制への挑戦
12	ヴェルサイユ・ワシントン体制の崩壊③－第二次世界大戦への道
13	第二次世界大戦と戦後への布石①－第二次世界大戦の勃発と拡大
14	第二次世界大戦と戦後への布石②－大同盟の戦時戦略
15	第二次世界大戦と戦後への布石③－戦後国際秩序を求めて
16	第二次世界大戦と戦後への布石④－ヤルタ会談と大戦の終結

【履修上の注意事項】

基本的なところから丁寧に講義をしますので心配は無用です。新資料の発見といった関連する新聞の記事に注意を払って下さい。気になる記事は切抜きをすとよいでしょう。

【評価方法】

試験を主とし出席を加味して評価します。

【テキスト】

使用しません。レジュメを配布します。

【参考文献】

柳沢英二郎他『危機の国際政治史』亜紀書房、1993年。杉本稔『現代ヨーロッパ政治史』北樹出版、2007年。

国際平和学 I

担当教員 西岡 信之

対象学年 1年

単位区分 選択

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

本講義では、ヨハン・ガルトゥング氏など平和学の理論的な部分は紹介程度にとどめ、現実にはいま起こっている国際社会の出来事、戦争と平和に関する取り組み等をドキュメンタリー映像を通じて考察する。

しかし、平和をどのように構築していくかの視点は、徹底した非暴力・非武装・無防備・非戦・無戦・市民的不服従による平和運動路線を貫く。米国では、イラク戦争の帰還兵による反戦運動が展開され、イラクでは、自由と平等を求める市民運動が広がっている。このような現実の社会問題に正面から注視し、平和を求める人たちの運動の展望を考え、「平和の危機」の時代に沖縄から平和を発信していく方法を共に考えたい。

【授業の展開計画】

前期の講義では、米国の戦争＝イラク・アフガニスタン戦争をとりあげ、戦争犯罪の実態、帰還兵士の反戦運動の現実を知る。またイラクでの自由と平等・民主化をめざす人々の取り組みを学ぶ。テーマとして、軍隊の暴力性、軍隊の本質、戦争犯罪、市民による非暴力による抵抗運動などを考察する。

後期では、沖縄戦、米軍基地、自衛隊、有事体制、無戦社会の実現に向けた内容とする。

週	授 業 の 内 容
1	国際平和学 I のガイダンス
2	市民自治－米国カリフォルニア州バークレー市がめざす市民本位の町づくり
3	イラク・アフガニスタン戦争とは何か？ 軍隊の暴力性を考える
4	イラク市民による自由と平等の国づくり地域づくり
5	反戦イラク帰還兵の証言集会
6	軍隊の背景にある格差貧困問題
7	国際刑事裁判所と戦争犯罪民衆法廷
8	フィリピンにおける平和運動
9	無人化ロボット戦争の現代
10	イラクー戦場の現実、終わらない占領政策
11	世界社会フォーラム① もうひとつの世界は可能だ
12	世界社会フォーラム② 中南米・アフリカの取り組み
13	日米安保条約とは何か
14	無防備地域宣言運動とは何か
15	
16	非武装国家① 軍隊をすてた国 コスタリカ

【履修上の注意事項】

私語、携帯電話の使用など周囲に迷惑のかかるような行為はしない。

「国際平和学 I」（前期）では、米国のイラク戦争など現代世界の戦争の実態を中心に学習し、「国際平和学 II」（後期）では、米軍、自衛隊、有事体制などの具体的な動きに対して、非暴力による市民的不服従の平和運動の取り組みを学ぶ。

【評価方法】

出席票に講義に関する感想、意見、質問などのコメントを毎回書いていただきます。それによって出欠状況と授業参加姿勢を見ます。期末にレポートを提出していただきます。出席・授業参加姿勢とレポートで評価を行います。試験は行いません。

【テキスト】

前期は特に指定しません。

毎回、レジュメと参考資料を配布します。

【参考文献】

『市民の平和力を鍛える』前田朗著 ケイ・アイ・メディア、『ブッシュの戦争犯罪を裁く』イラク国際戦犯民衆法廷準備編 現代人文社、その他は、講義の中でその都度紹介する。

国際平和学 I

担当教員 安良城 米子

対象学年 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2

【授業のねらい】

本講義では、戦争の諸原因と平和の諸条件を学んでいく。平和の追求は戦争や紛争などの直接的（人為的）暴力の不在の平和はもとより、環境破壊、飢餓、貧困、抑圧、差別などの構造的暴力のない積極的平和を目指すとの理解を深め、積極的平和創造の努力の方向性を模索していく。特に沖縄においては、沖縄戦と米軍基地問題を平和学の視点で学ぶ。それらのことから「ローカル」な問題を「グローバル」な視野で捉えることが求められていること、同時に、この世界的な平和の危機の時代に沖縄から発信する平和とは何かを共に考えたい。

【授業の展開計画】

<前期>

まず、前期は「平和学」とは、「平和」とはを、基礎的な理論を通して理解を深める。同時に平和学の対象となる具体的な事例、直接的（人為的）暴力を平和学の視点で考察していく。

週	授 業 の 内 容
1	平和学へのアプローチ—私たちは今どのような時代に生きているのだろうか
2	平和をめぐる旅—私の出会った人々
3	平和学の方法—エンパワメントとエクスポージャーのすすめ
4	グローバル時代の平和学—「アフガンに命の水を」
5	沖縄戦認識①—「沖縄靖国神社合祀取消裁判」を通して
6	沖縄戦認識②—「沖縄靖国神社合祀取消裁判」を通して
7	沖縄戦と有事法制①—国内法・国際法の視点から
8	沖縄戦と有事法制②
9	非暴力平和思想の具現化—無防備地域宣言運動
10	
11	沖縄住民と軍事基地—普天間爆音訴訟を通して
12	沖縄住民と軍事基地
13	「国家」とは—平和国家を問う沖縄
14	「国家安全保障」から「人間の安全保障」へ
15	復習
16	期末試験

【履修上の注意事項】

新聞をよく読むこと（特に国際関係、平和、基地、人権など）

私語、携帯電話の使用など周囲に迷惑のかかるような行為はしない。

「国際平和学 I」では、平和学の理論と平和と戦争に関わる問題に絞り講義し、「国際平和学 II」では、その理論を踏まえて構造的暴力の事例を中心に授業を行う。そのため、後期の受講は前期を履修した学生であることが望ましい。

【評価方法】

出席用紙に講義に関するコメントを書いてもらう。それにより出欠状況と授業参加姿勢をみる。レポート、期末試験を総合して判断、評価する。

出席・授業参加姿勢（30%）、レポート（30%）、試験（40%）。

【テキスト】

- ・『ピース・ナウ沖縄戦—無戦のための再定位』2011年（法律文化社）を使用する。
- ・毎回、レジュメを配布する。視覚教材のビデオを用いて授業をすすめる。

【参考文献】

『危機の時代の平和学』木村 朗著 法律文化社、『今平和とは何か』藤原 修／岡本三夫編 法律文化社
『オキナワを平和学する』石原昌家・仲地 博編 法律文化社、その他は、講義の中でその都度紹介する。

国際平和学Ⅱ

担当教員 西岡 信之

対象学年 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2

【授業のねらい】

近年、国連人権理事会で平和を「個人の権利」かつ「市民の権利」として再定義し、平和の権利国連宣言を求める動きが始まっている。これまでの平和学が、平和を状態としてとらえて考えられてきたが、平和への権利や平和的生存権の思考は、平和を「状態」ではなく「権利」として把握する方向に向かっている。

本講義では、そうした最新の国連人権理事会で取り組まれている動きを紹介するとともに、沖縄戦、現在の日米軍事一体化などの動きの中で、地域から戦争に協力しない平和づくりの可能性を研究する。

【授業の展開計画】

後期の講義では、反基地と脱原発の運動の持つ共通性を確認する。また沖縄戦、米軍基地、自衛隊、有事体制＝国民保護計画などのテーマにそって、「軍民分離」原則の国際人道法の基準にてらしあわせる形で、無戦社会の実現に向けた課題と展望を考察する。さらに「平和への権利宣言」の可能性を追求する。

週	授 業 の 内 容
1	国際平和学Ⅱのガイダンス
2	3・11後の世界、日本、沖縄－反基地と脱原発
3	原子力「核」のない無戦社会の実現を
4	有事法制下の日本・沖縄のいま ー国民保護計画とは何か
5	文民保護の国際ルール ー「軍民分離」原則
6	憲法九条・非暴力平和思想の具現化 ー無防備地域宣言運動
7	沖縄戦－軍隊のいない島
8	沖縄戦－軍隊のいない地域
9	沖縄戦－朝鮮半島から強制連行された若者たち
10	靖国神社と沖縄戦 ー戦争犠牲者の合祀取り消し裁判
11	平和への権利を世界に ー国連宣言実現の動向と運動
12	日米軍事同盟・安保問題のいま
13	軍隊のない国家－27の国々と人々
14	軍隊を拒否した地域・ゾーン・エリア
15	基地と差別の島・沖縄からの解放 ー軍隊・格差・貧困のない社会を
16	非暴力、非武装、無防備の平和の作り方 ー無戦社会を展望する

【履修上の注意事項】

私語、携帯電話の使用など周囲に迷惑のかかるような行為はしない。また大幅な遅刻や早退、途中退席などは、授業参加姿勢に課題があると評価します。

【評価方法】

出席票に講義に関する感想、意見、質問などのコメントを毎回書いていただきます。それによって出欠状況と授業参加姿勢を見ます。期末にレポートを提出していただきます。出席状況、授業参加姿勢、レポートで評価を行います。試験は行いません。

【テキスト】

「ピース・ナウ沖縄戦 ー無戦のための再定位」(法律文化社)。また必要に応じて、レジュメと参考資料を配布します。

【参考文献】

「市民の平和力を鍛える」前田朗著、ケイ・アイ・メディア。その他、講義の中でその都度紹介する。

国際平和学Ⅱ

担当教員 安良城 米子

対象学年 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2

【授業のねらい】

本講義では、戦争の諸原因と平和の諸条件を学んでいく。平和の追求は戦争や紛争などの直接的（人為的）暴力の不在の平和はもとより、環境破壊、飢餓、貧困、抑圧、差別などの構造的暴力のない積極的平和を目指すとの理解を深め、積極的平和創造の努力の方向性を模索していく。特に沖縄においては、沖縄戦と米軍基地問題を平和学の視点で学ぶ。それらのことから「ローカル」な問題を「グローバル」な視野で捉えることが求められていること、同時に、この世界的な平和の危機の時代に沖縄から発信する平和とは何かを共に考えたい。

【授業の展開計画】

<後期>

戦争や紛争のただ中にあるわけではないが、決して平和とは言えない状況がある。それら構造的暴力を明らかにしつつ、積極的平和構築の希望の道標を求めていく。

週	授 業 の 内 容
1	「平和」とは－世界は今… 構造的暴力の不在を求めて
2	積極的平和とは－構造的暴力とは
3	市民社会とグローバルな諸課題－開発NGOを中心に
4	貧困－インドの経済学者ムハマド・ユヌス氏（ノーベル平和賞受賞）の活動
5	国際連合とNGO－ユニセフを通して「激動の地で子どもを守る」
6	紛争地で命がけの交渉－「武装解除のプロは女性32歳」
7	環境と平和学－環境問題における直接的暴力と構造的暴力
8	世界人権宣言
9	世界人権宣言
10	ジェンダー・ジャスティスを求めて－国際刑事裁判所設立まで
11	戦時性暴力を裁く－「女性国際戦犯法廷」の意義
12	帝国主義と脱植民地化－人種主義と多文化主義
13	「先住民の権利に関する国連宣言」
14	平和に捧げた生涯／マザー・テレサ
15	復習
16	期末試験

【履修上の注意事項】

新聞をよく読むこと（特に国際関係、平和、基地、人権など）

私語、携帯電話の使用など周囲に迷惑のかかるような行為はしない。

「国際平和学Ⅰ」では、平和学の理論と平和と戦争に関わる問題に絞り講義し、「国際平和学Ⅱ」では、その理論を踏まえて構造的暴力の事例を中心に授業を行う。そのため、後期の受講は前期を履修した学生であることが望ましい。

【評価方法】

出席用紙に講義に関するコメントを書いてもらう。それにより出欠状況と授業参加姿勢をみる。レポート、期末試験を総合して判断、評価する。

出席・授業参加姿勢（30%）、レポート（30%）、試験（40%）。

【テキスト】

- ・『ピース・ナウ沖縄戦－無戦のための再定位』2011年（法律文化社）を使用する。
- ・毎回、レジュメを配布する。視覚教材のビデオを用いて授業をすすめる。

【参考文献】

『『危機の時代の平和学』木村 朗著 法律文化社、『今平和とは何か』藤原 修／岡本三夫編 法律文化社
『オキナワを平和学する』石原昌家・仲地 博編 法律文化社、その他は、講義の中でその都度紹介する。

タイ研究

担当教員 原田 優也

対象学年 1年

単位区分 選択

準備事項

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2

【授業のねらい】

本講義は、地域研究の視点から、タイ国の歴史を機軸としながら、現在の政治、社会文化、経済、ビジネスについて幅広く知り、国際理解のための視野を広めることを目的とします。講義形式は、つぎのとおりです。

- 1) タイの地域研究について、テーマ別概要・既存研究の成果を、資料、映像などをおりまぜながら講義する。
- 2) 講義内容をもとに、関心のあるテーマについてグループ分けし、文献調査の成果を報告する。
- 3) タイ語の日常会話の学習をとおして、生きたタイの文化にふれる。

【授業の展開計画】

- 1) オリエンテーション ・自己紹介アンケート
- 2) タイ国の概要： VDO・映画に学ぶタイの諸相 -インドシナの歴史、タイの国土と人
- 3) 現代のタイ社会(1)： 経済開発と地域格差 (都市化、スラムの形成、中間層の発展)
- 4) 現代のタイ社会(2)： 今日の問題 (HIV/AIDS、高齢化と社会福祉など)
- 5) 現代のタイ社会(3)： 映画 (AIDS 問題)
- 6) タイの政治文化(1)： 王制と民主主義
- 7) タイの政治文化(2)： 官僚制度
- 8) タイの環境問題(1)： ごみ問題・環境教育
- 9) タイの環境問題(2)： 東北地方のダム開発問題
- 10) タイのビジネス(1)： ファミリービジネス、華僑
- 11) タイのビジネス(2)： 外資系企業の進出と発展
- 12) タイのビジネス(3)： 観光産業、アグリ・ビジネスなど
- 13) タイと日本・沖縄の共通性の検討(1)： (家族関係、中国文化圏)
- 14) タイと日本・沖縄の共通性の検討(2)： (食文化、J-POP、伝統の遊び方など)
- 15) まとめ
- 16) 期末試験・レポートの提出

【履修上の注意事項】

- (1) 積極的に学ぶ姿勢が必要である。
- (2) 出席を重視し、講義回数の3分の1以上を欠席した場合は、不合格とするので注意すること。
- (3) 授業中の携帯電話、飲食、私語、迷惑行為等は教室から退出させ再入室させない。

【評価方法】

出席、発表、期末試験・課題などで総合的に評価する。

【テキスト】

- 綾部恒雄ほか(2003) 『タイをしるための60章』 明石書店
- 講義の中で、適切なテキストを指示する。

【参考文献】

各講義テーマに関する参考文献は、授業進度にあわせて紹介していきます。

多民族論

担当教員 石垣 直

対象学年 1年

単位区分 選択

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

20世紀そして21世紀は「民族紛争の時代」といわれる。「民族」とは何なのか、それは「国民」とどう違うのか、それは歴史的にどのように形成されてきたのか、それが「問題化」する要因とはなにか？ 本講義の主眼は、「民族」をめぐる歴史のおよび現代的状況を世界各地の具体的な事例に基づいて理解することにある。政治・経済的な視点のみならず、人類学的な観点から「民族」を取り巻く現状を解き明かす。

【授業の展開計画】

- ①ガイダンス
- ②「民族」とは何か
- ③「民族」をめぐる議論
- ④近代国民国家の成立
- ⑤植民地主義と「民族」
- ⑥アフリカ
- ⑦中東
- ⑧映像鑑賞
- ⑨アジア（1）
- ⑩アジア（2）
- ⑪太平洋
- ⑫映像鑑賞
- ⑬北アメリカ・南アメリカ
- ⑭ヨーロッパ
- ⑮まとめ

【履修上の注意事項】

毎回授業の際に、出席確認をかねて、受講生にレスポンス・ペーパーを配布し、授業に対する感想・質問・意見などを受け付ける。なお、他の受講生の学習を妨害するような言動があった場合には、退席を要求することもあるので注意されたい。

【評価方法】

出席（30%）、筆記試験（35%）、レポート（35%）
毎回の授業時に出席および授業参加姿勢を確認するためのレスポンス・ペーパーの提出をもとめる。また、学期末には講義内容にかんする筆記試験、ならびに世界各地の民族紛争や民族・エスニシティ論にかんするレポートを課し、出席・授業参加姿勢とともに総合的に評価する。

【テキスト】

特になし。（毎回の講義ではレジюмеおよび資料を配布する）

【参考文献】

松原正毅（編）2002『世界民族問題事典』東京：明石書店ほか

多民族論

担当教員 前原 直子

対象学年 1年

単位区分 選択

開講時期 後期

授業形態

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

本授業では、日本及び世界の各地におけるさまざまな事例を考察しながら、「民族」と「国家」をめぐる諸問題について理解・考察できるようになることを目指します。移住労働者や少数民族、内戦と民族問題、そして異文化のせめぎ合いにおけるアイデンティティの政治と諸権利について考察しながら、多民族・多文化共生社会を築くための手がかり足がかりを一緒に探っていきたいと思えます。

【授業の展開計画】

1. イントロダクション
2. 「民族」とは何か？—「エスニシティ」、「ネーション」、「人種」
3. エスニック・アイデンティティと帰属意識
4. ナショナリズムの誕生
5. 「日本人」の形成①
6. 「日本人」の形成②—「沖縄人」「琉球民族」
7. 「アメリカ人」の形成
8. 少数派と国家
9. エスニック紛争—北アイルランドを例に①
10. エスニック紛争—北アイルランドを例に②—「血の日曜日事件」
11. アイデンティティ・ポリティックス、文化そして諸権利
12. 多民族・多文化共生社会をめざして①—「在日」
13. 多民族・多文化共生社会をめざして②—「外国人労働者」
14. 多民族・多文化共生社会をめざして③
15. 総まとめ
16. 試験

【履修上の注意事項】

毎週、授業の終わりにレスポンス・ペーパーを書いてもらい、それを評価および受講生と担当教員との「対話手段」として用います。意欲的な授業参加を求めます。

【評価方法】

授業への参加姿勢およびレスポンス・ペーパー（40%）、最終試験（60%）を総合的に評価します。

【テキスト】

配布資料や映像教材等を用います。

【参考文献】

講義の中で適宜紹介します。

ミクロネシアと日本 I

担当教員 石川 朋子

対象学年 1年

単位区分 選択

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

現在、ミクロネシア（キリバス、ナウルを除く）と呼ばれている地域は、スペイン、ドイツ、日本、アメリカが統治していた。日本は、第一次世界大戦後、国際連盟委任統治領としてこの地域を統治していた。本講義では、これらの統治の特徴を紹介し、ミクロネシアと日本の関係を考える。またナウル、キリバスと日本の関係にも触れる。

【授業の展開計画】

- 1回 講義概要、登録確認
- 2回 ミクロネシアとは
- 3回 ミクロネシアの伝統社会
- 4回 ミクロネシアの伝統社会
- 5回 ミクロネシアの宗主国の変遷
- 6回 ミクロネシアの宗主国の変遷
- 7回 ミクロネシアの宗主国の変遷
- 8回 国際連盟委任統治領と国連信託統治領
- 9回 日本の統治
- 10回 日本の統治
- 11回 日本の統治
- 12回 日本の統治
- 13回 ミクロネシアの自立
- 14回 予備
- 15回 テスト又はレポート提出

【履修上の注意事項】

【評価方法】

出席、レポート、テスト等の総合評価

【テキスト】

講義は、毎回配布するレジュメと資料に沿って行う。

【参考文献】

講義のなかで適宜紹介します。

ミクロネシアと日本Ⅱ

担当教員 石川 朋子

対象学年 1年

単位区分 選択

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

ミクロネシアと日本の歴史的な関係は、明治以前までさかのぼることができる。明治以前のミクロネシアと日本の関係は、個人が漂流、捕鯨、交易などであった。官民レベルでミクロネシアに関心をもたれたのは、明治に入ってからであった。最も日本とミクロネシア（ナウル、キリバスは除く）と関係が深くなるのは、ミクロネシアが第一次世界大戦後、国際連盟委任統治領となり、日本がこれらの地域の受任国となった頃である。

本講義では、ミクロネシアと日本の関係を「南洋移民」を通して考える。

【授業の展開計画】

- 1回 講義概要、登録確認
- 2回 ミクロネシアの概要
- 3回 ミクロネシアの宗主国の変遷
- 4回 ミクロネシアの宗主国の変遷
- 5回 ミクロネシアの宗主国の変遷
- 6回 日本人の「南洋」関与
- 7回 南洋移民の展開
- 8回 南洋移民の展開
- 9回 南洋移民の展開
- 10回 ミクロネシアにおける戦争
- 11回 ミクロネシアにおける戦争
- 12回 第二次世界大戦後のミクロネシア
- 13回 第二次世界大戦後のミクロネシア
- 14回 予備
- 15回 テスト又はレポート提出

【履修上の注意事項】

【評価方法】

出席、レポート、テスト等の総合評価

【テキスト】

講義は、毎回配布するレジュメと資料に沿って行う。

【参考文献】

講義のなかで適宜紹介します。

ヨーロッパ研究ゼミ

担当教員 漆谷 克秀

対象学年 3年

単位区分 選択

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4

準備事項

備考

【授業のねらい】

ヨーロッパは、政治的にも(議会制民主主義)、経済的にも(資本主義市場経済)、現在の私たちが生活する枠組みを創出してきました。履修者各自が、興味ある分野、文化、芸術、歴史、言語、政治、経済など考究し、発表を通して全員で現在のヨーロッパを考えていきましょう。前期は、参加者で分担を決め、テキストを輪読します。最初は、「ヨーロッパ学入門」というテキストを輪読しながら、様々な分野の概要を知る。夏休みにレポートを作成する。後期は提出レポートをもとに参加者全員で討議を繰り返し、最終レポートを作成する。

【授業の展開計画】

- | | |
|---------------------------|------------------------------|
| 1週：講師と受講生の自己紹介、授業のガイダンス | 16週：前期の要約、後期の分担を決める。 |
| 2週：テキストの輪読「ヨーロッパ世界の形成と変容」 | 17週：提出レポートの発表(2-3名)、ディスカッション |
| 3週：同上、「非ヨーロッパ圏から考えるヨーロッパ」 | 18週：提出レポートの発表(2-3名)、ディスカッション |
| 4週：同上「EUの歴史と現在」 | 19週：提出レポートの発表(2-3名)、ディスカッション |
| 5週：同上「ヨーロッパの言語」 | 20週：提出レポートの発表(2-3名)、ディスカッション |
| 6週：同上「ヨーロッパ多言語主義の可能性」 | 21週：提出レポートの発表(2-3名)、ディスカッション |
| 7週：同上「ヨーロッパの神話と民話」 | 22週：書き換えたレポートの発表とディスカッション |
| 8週：同上「近代ヨーロッパ社会のなかの音楽」 | 23週：書き換えたレポートの発表とディスカッション |
| 9週：同上「ヨーロッパの思想」 | 24週：書き換えたレポートの発表とディスカッション |
| 10週：同上「ヨーロッパの思想」 | 25週：書き換えたレポートの発表とディスカッション |
| 11週：同上「ヨーロッパとキリスト教」 | 26週：最終レポートの発表 |
| 12週：同上「ヨーロッパとキリスト教」 | 27週：最終レポートの発表 |
| 13週：同上「近代〈前衛〉ノ試みと女性芸術家」 | 28週：最終レポートの発表 |
| 14週：同上「日欧交流史序説」 | 29週：最終レポートの発表 |
| 15週：同上「東アジアとヨーロッパ」、前期のまとめ | 30週：後期のまとめと最終レポートの提出 |

【履修上の注意事項】

全学部、全学科の3年、4年生が受講できます。卒論と関連させて、ヨーロッパの事項を考察したい学生も歓迎します。発表する機会が多いと思います。参加者全員で授業を創っていくことにしましょう。

【評価方法】

出席と発表とレポートの提出で評価します。

【テキスト】

プリントを随時配布します。

【参考文献】

新たなテキストや発表者の中心となるテキストは、その都度購入して読むようにします。

ヨーロッパ研究 I

担当教員 漆谷 克秀

対象学年 1年

単位区分 選択

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

「ヨーロッパ研究 I」では、主としてドイツを中心としたヨーロッパの現代的な問題を対象にして講義します。ドイツが、ヨーロッパが、どのような未来を模索しているのかを考える契機になるようにしたい。それぞれの問題が、ヨーロッパだけではなく、今日的な国際的な問題として私たちにも関わっていることを理解していただきたい。

【授業の展開計画】

- 1週： 授業の概要、
- 2週： ヨーロッパとは何か（地理学的特徴、言語の多様性、ヨーロッパの範囲）
- 3週： ヨーロッパとは何か（地理学的特徴、言語の多様性、ヨーロッパの範囲）
- 4週： 元ドイツ連邦共和国大統領ヴァイツゼカーの1985年5月8日の演説
- 5週： 元ドイツ連邦共和国大統領ヴァイツゼカーの1985年5月8日の演説
- 6週： 1920年代30年代のヨーロッパ
- 7週： 1920年代30年代のヨーロッパ
- 8週： ナチズム、アウシュヴィッツ、ナチス追及、歴史家論争
- 9週： ナチズム、アウシュヴィッツ、ナチス追及、歴史家論争
- 10週： 二つのドイツ、ベルリンの壁、ドイツ統一
- 11週： 二つのドイツ、ベルリンの壁、ドイツ統一
- 12週： ヨーロッパの民族問題、ハブスブルク家、「中欧」という概念
- 13週： 難民問題、ドイツの庇護政策、ドイツの極右主義
- 14週： 環境問題（森と軍事基地）、ドイツのフェミニズム、ヨーロッパ統合は可能か
- 15週： テスト

【履修上の注意事項】

出席をとります。ノートを用意して、講義内容を筆記してください。毎回講義を受けていないと分からなくなります。休まないように。質問は歓迎します。私語は止めること。再試・追試は一切行わない。

【評価方法】

主として、学期末試験で評価します。レポートと出席も加味します。

【テキスト】

授業に必要なプリントを配布します。

【参考文献】

授業中に紹介する文献を読むようにしてください。

ヨーロッパ研究Ⅱ

担当教員 大下 祥枝

対象学年 1年

単位区分 選択

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

ヨーロッパ研究という大きなテーマですが、講義では主として18世紀後半から20世紀にかけてのフランスの政治・社会・文化を取り上げます。講義内容に関連するビデオを鑑賞したり、挿絵本や絵葉書などを閲覧する時間も設ける予定です。

【授業の展開計画】

- 1回 講義内容の説明
- 2回 変貌するパリ (ビデオ)
- 3回 パリ大改造
- 4回 パサージュ
- 5回 書物について
- 6回 政治とカリカチュア (ビデオ)
- 7回 モードの情報
- 8回 サロンの伝統
- 9回 カフェの歴史
- 10回 アカデミー・フランセーズ
- 11回 ナポレオンの遠征
- 12回 東方趣味 (ビデオ)
- 13回 パリ万博・フランスと琉球王国
- 14回 アール・ヌーヴォーの作品
- 15回 教会とステンドグラス
- 16回 まとめとレポートの課題

【履修上の注意事項】

ヨーロッパ研究Ⅰを履修していなくても、ヨーロッパ研究Ⅱを受講することができます。毎時間、講義内容に関する資料を配布するので、欠席しないこと。

【評価方法】

ビデオの感想文を提出していない受講生は、最終レポートを提出する資格を失います。レポート課題に関する資料収集の方法や、まとめ方を重視して成績を評価します。

【テキスト】

講義内容のレジюмеと関係資料を配布します。

【参考文献】

参考文献については、適宜紹介します。

ラテンアメリカ研究

担当教員 上原 盛毅

対象学年 1年

単位区分 選択

開講時期 前期・後期

授業形態 一般講義

単位数 2

準備事項

備考

【授業のねらい】

ラテンアメリカとアングロアメリカは同じアメリカ大陸において多くの点で著しい対照を示している。また、北米から中米、南米にかけて20ヶ国を包含するラテンアメリカ諸国もラテン的同質性（言語や宗教など）と同時に、地理的にも、歴史的にも、文化的にも多様性に富んでいる。その根幹を成すスペイン、ポルトガルの歴史・文化に目を向けつつ、新大陸を席卷した民族的エネルギー、土着文化を併合した融通性、近代における進歩と停滞を検討する。更に、わが国、特に、沖縄との関係の深い移住の問題も考える

【授業の展開計画】

- ①米大陸に根付く二つの西欧文明（ラテンとアングロ）
- ②イスラムの支配を受けたスペイン・ポルトガルの特異性
- ③世界を一つに繋げたスペイン・ポルトガルの地理上の発見と大航海時代
- ④⑤米大陸に現れた高度石器文明帝国の謎と崩壊の悲劇（アステカとインカ）
- ⑥征服から殖民へー新大陸に移植されたラテン的世界
- ⑦独立か、然らずんば死かーラテンアメリカ諸国の独立
- ⑧⑨愚かなる紛争・3つの戦争と近代化への苦悩・3大社会革命
- ⑩⑪人はなぜ移住するかーロマンと苦闘の移民物語、沖縄の先人たちの歩んだ道
- ⑫⑬日本とラテンアメリカの相互関係（政治経済、ODA、青年海外協力隊活動など）
- ⑭沖縄と関係の深い4カ国（ブラジル、アルゼンチン、ペルー、ボリビア）
- ⑮ラテンアメリカ全体のまとめ
（授業内容や順序は変更もありうる）
- ⑯レポート提出

【履修上の注意事項】

高校程度の世界史の知識及び海外問題（特に、ラテンアメリカ）に関心を有すること。また、3回以上の連続欠席、或いは半分以上の欠席は単位修得に支障をきたす場合がある

【評価方法】

授業時毎に講義内容のレジメおよび参考資料を配布するので、出席が重要となる。従って、成績は出席状況及び3回の課題（レポート）の提出により、総合的に評価する（第1回目は資料を通してのラテンアメリカに対するイメージ・概念の形成、第2回目はラテンアメリカの特定事項に対する調査・研究、第3回目はラテンアメリカに対する得意分野の設定）。

【テキスト】

特に指定せず、毎回授業時に独自のレジメを配布する。

【参考文献】

「ラテンアメリカ研究への招待」新評論 国本伊代他
「ラテンアメリカ事典」ラテンアメリカ協会